

第1章 頭頸部穿刺吸引細胞診

リンパ節病変の鑑別アトラス

リンパ節腫大を主訴とした患者に行われる穿刺吸引細胞診，あるいは生検捺印細胞診に最も鑑別を必要とするのは，反応性濾胞過形成や炎症性変化などの良性リンパ節病変と悪性リンパ腫との鑑別である．また，臨床的にリンパ節腫大を初発症状とする原発不明癌などの転移性腫瘍も念頭に観察しなければならない．このような場合，標本全体から受ける印象や特徴ある細胞の存在に着目して順序立てて観察すると判定しやすい．

リンパ節標本を観察した場合，全体から受ける印象としては，主体を示す細胞はどのような細胞（小型～中型リンパ球？ 中型～大型リンパ球？ あるいは大型リンパ球？）であるのか，また，出現するリンパ球系細胞に大小不同や形態の多様性がみられるのか？ などがあげられる．さらに特徴ある細胞の存在に着目した標本の見方としては，大型あるいは多核異型細胞が認められる場合，類上皮細胞の増加，好酸球の増加，小型形質細胞あるいは形質細胞様細胞がみられる場合，中型～大型の形質細胞あるいは形質細胞様細胞がみられる場合，などが考えられる．

小型～中型リンパ球が主体を占めるリンパ節病変としては，反応性濾胞過形成（写真1），組織球性壊死性リンパ節炎，皮膚病性リンパ節症などの良性病変が，悪性病変ではマントル細胞リンパ腫，濾胞性リンパ腫，B細胞性小細胞リンパ腫，リンパ形質細胞性リンパ腫，ホジキンリンパ腫，癌の転移などがあげられる．中型～大型リンパ球が主体を占めるリンパ節病変は，良性では反応性濾胞過形成あるいは組織球性壊死性リンパ節炎が，悪性ではリンパ芽球性リンパ腫，びまん性大細胞型B細胞リンパ腫，パーキットリンパ腫，濾胞性リンパ腫（写真2a），節外性NK/T細胞リンパ腫，成人T細胞性白血病／リンパ腫，末梢性T細胞リンパ腫（非特異型），血管免疫芽球型T細胞リンパ腫がある．大型リンパ球様細胞が主体を占めるリンパ節病変は，濾胞性リンパ腫（grade3），未分化大細胞型リンパ腫，びまん性大細胞型B細胞リンパ腫（写真2b）（免疫芽球型，中心芽球型，未分化大細胞型），末梢性T細胞リンパ腫（非特異型）があげられる．多彩な細胞像を呈するリンパ節病変としては，反応性濾胞過形成，ウイルス性リンパ節炎，血管免疫芽球型T細胞リンパ腫，末梢性T細胞リンパ腫（非特異型），成人T細胞性白血病／リンパ腫（写真3），ホジキンリンパ腫などである．また，大型あるいは多核異型細胞が認められるリンパ節病変では，ホジキンリンパ腫はもとより，成人T細胞性白血病／リンパ腫，末梢性T細胞リンパ腫（非特異型）（写真4a），未分化大細胞型リンパ腫，びまん性大細胞型B細胞リンパ腫（未分化大細胞型）などとの鑑別を必要とする．類上皮細胞を認めた場合は，結核性リンパ節炎，サルコイドーシス（写真4b），猫引っ掻き病，末梢性T細胞リンパ腫（非特異型），血管免疫芽球型T細胞リンパ腫，ホジキンリンパ腫などの病変と鑑別しなければならない．さらに好酸球の増加所見（写真5）がみられた場合は，好酸球性肉芽腫，末梢性T細胞リンパ腫（非特異型），血管免疫芽球型T細胞リンパ腫，ホジキンリンパ腫を考えなければならない．Giemsa染色にて細胞質が好塩基性を示す小型形質細胞がみられるリンパ節病変としては，反応性濾胞過形成，ウイルス性リンパ節炎，リンパ形質細胞性リンパ腫（写真6a），末梢性T細胞リンパ腫（非特異型），血管免疫芽球型T細胞リンパ腫，ホジキンリンパ腫があげられる．また，中型～大型の形質細胞，あるいは形質細胞様細胞がみられるリンパ節病変は，形質細胞性腫瘍，成人T細胞性白血病／リンパ腫，末梢性T細胞リンパ腫（非特異型），血管免疫芽球型T細胞リンパ腫（写真6b）との鑑別を要する．

本稿では上記したリンパ節標本全体から受ける印象や特徴ある細胞の存在から考えられる病変の鑑別点についてフローチャート形式にて解説する．

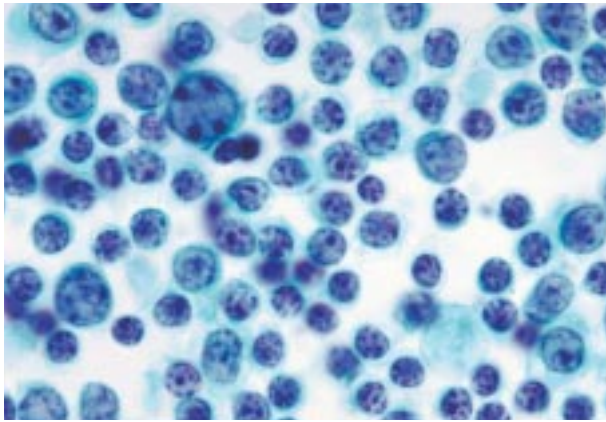


写真1 反応性濾胞過形成 (Pap染色, 対物×100)
 小型リンパ球を主体に中型～大型リンパ球が混在している。核は類円形で核形不整は目立たない。小型リンパ球はクロマチン凝集高度で均等分布, 小型核小体もみられる。

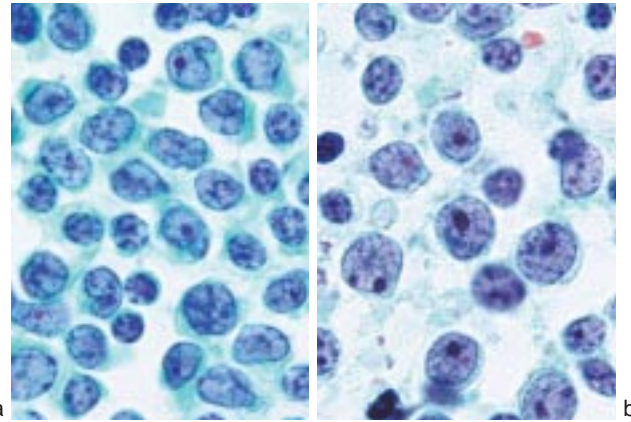


写真2 a: 濾胞性リンパ腫 grade 2
 (a, b: Pap染色, 対物×100)
 中型～大型リンパ球大の腫瘍細胞が単調に出現。核のくびれが著明である。
b: びまん性大細胞型B細胞リンパ腫
 腫瘍細胞のクロマチン凝集は軽度, 大型核小体を有している。

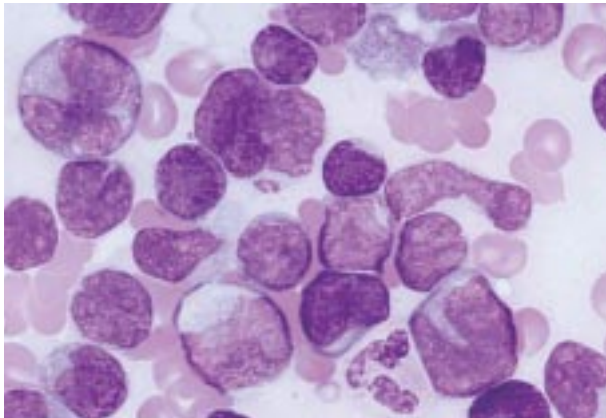


写真3 成人T細胞性白血病/リンパ腫
 (Giemsa染色, 対物×100)
 腫瘍細胞は大小不同が目立ち著明な核形不整(桑実状様, 脳回状, 分葉状)を特徴とする。細胞質の染色性も出現する細胞間で異なり, 濃淡を認める。

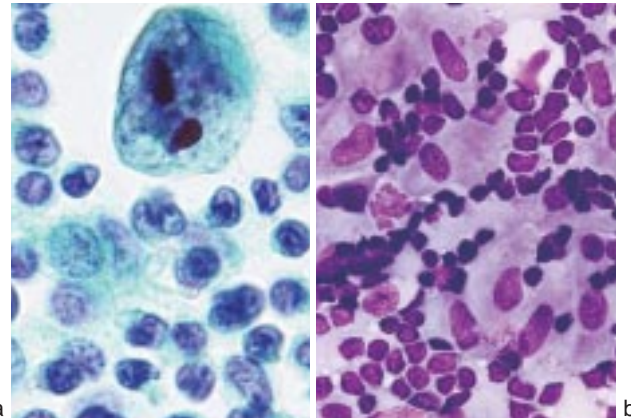


写真4 a: 末梢性T細胞リンパ腫, 非特異型
 (Pap染色, 対物×100)
 腫瘍細胞は核形不整の目立つ中型リンパ球大である。RS細胞様多核巨細胞もみられる。
b: サルコイドーシス (Giemsa染色, 対物×40)
 細胞質が広く, 組織球様の核を有する類上皮細胞がみられる。

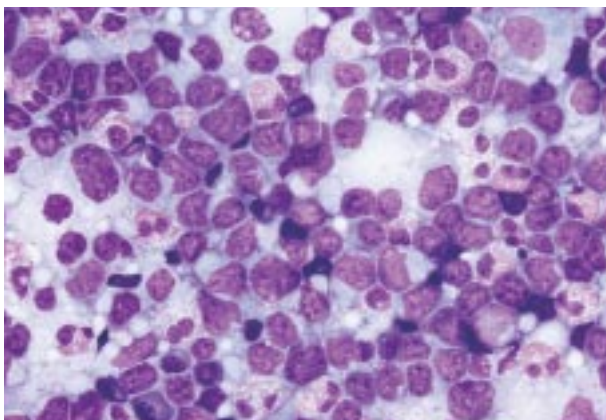


写真5 末梢性T細胞リンパ腫, 非特異型
 (Giemsa染色, 対物×40)
 腫瘍細胞は中型～大型リンパ球大で出現。多数の好酸球や形質細胞もみられる。小型リンパ球の出現率は低い。

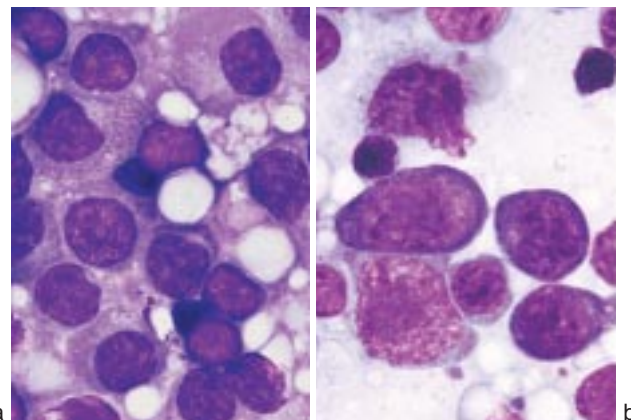
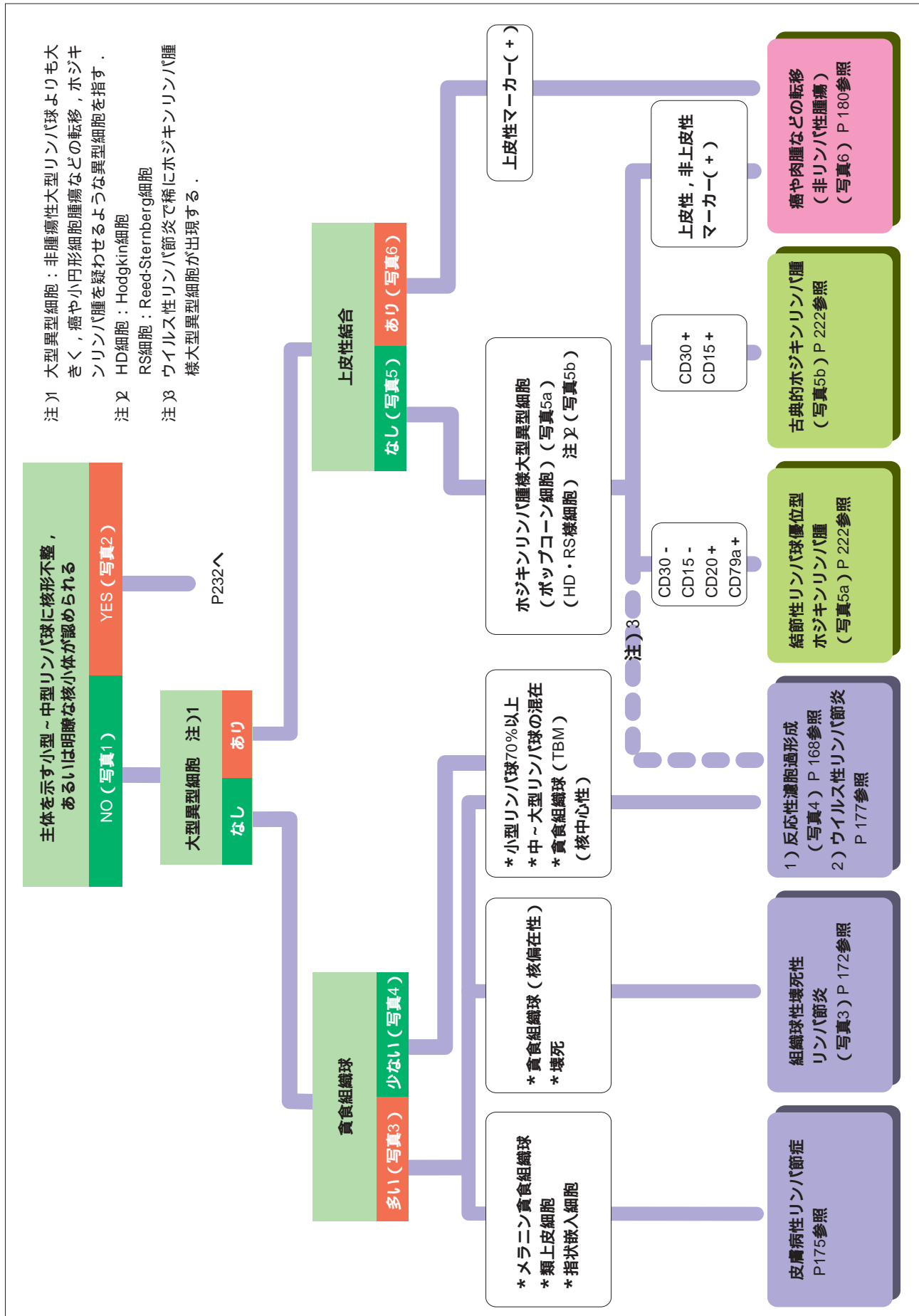


写真6 a: リンパ形質細胞性リンパ腫
 (Giemsa染色, 対物×100)
 リンパ形質細胞がみられる。
b: 血管免疫芽球型T細胞リンパ腫
 (Giemsa染色, 対物×100)
 形質細胞よりも大きく核小体を有する類形質細胞がみられる。

1. 小型～中型リンパ球が主体（70%以上）を占めるリンパ節病変の鑑別 1



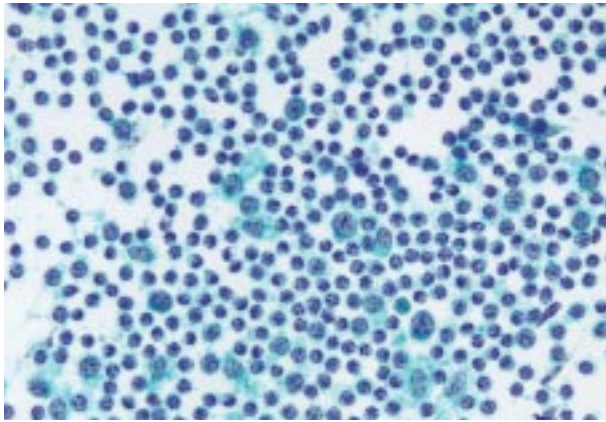


写真1 反応性濾胞過形成 (Pap.染色, 対物×40)
 小型リンパ球を主体に中型～大型リンパ球が混在している。小型リンパ球は70～80%以上を占めている。

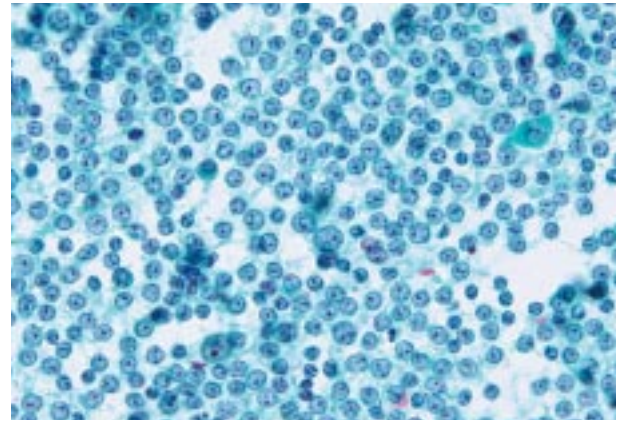


写真2 マントル細胞リンパ腫 (Pap.染色, 対物×40)
 中型リンパ球大の腫瘍細胞が単調に出現している。核は類円形でクロマチン凝集は軽度、弱拡大においても明瞭な核小体が観察される。

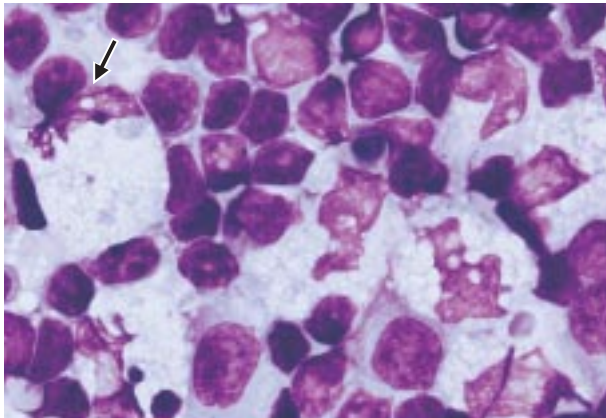


写真3 組織球性壊死性リンパ節炎
 (Giemsa染色, 対物×100)
 小型リンパ球主体で大型リンパ球も出現。核や細胞質の破片を貪食した組織球がみられる。核は偏在性で三日月状を呈している()。

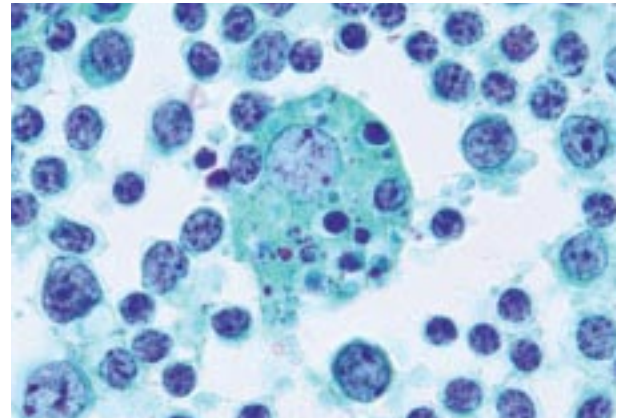


写真4 反応性濾胞過形成 (Pap.染色, 対物×100)
 中央に核片を貪食したTBMがみられる。核は比較的中心性に位置する。TBMの出現は良性疾患の可能性を示唆する所見となる。ただし、増殖能の高いリンパ腫でも出現するため総合的な判定が重要である。

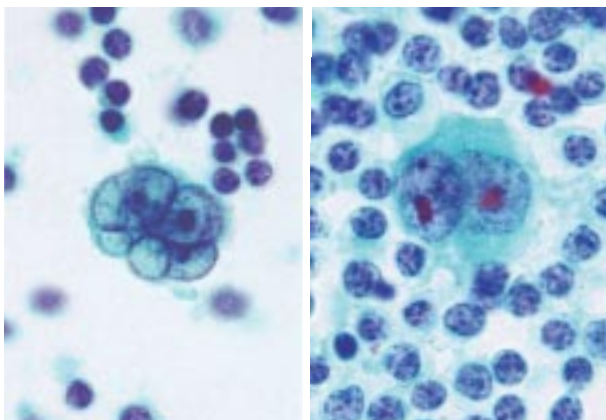


写真5 a : 結節性リンパ球優位型ホジキンリンパ腫
 (Pap.染色, 対物×100)
 本症例の腫瘍細胞は核がねじれたように分葉状を呈しておりポップコーン細胞と称される。
b : 古典的ホジキンリンパ腫 (Pap.染色, 対物×100)
 Mirror image patternを示し明瞭な核小体を有するRS細胞がみられる。

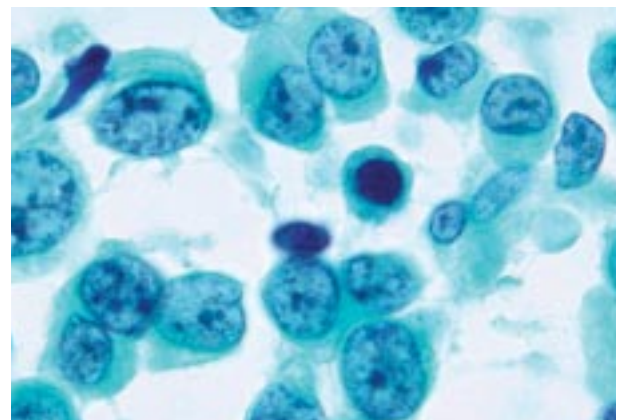
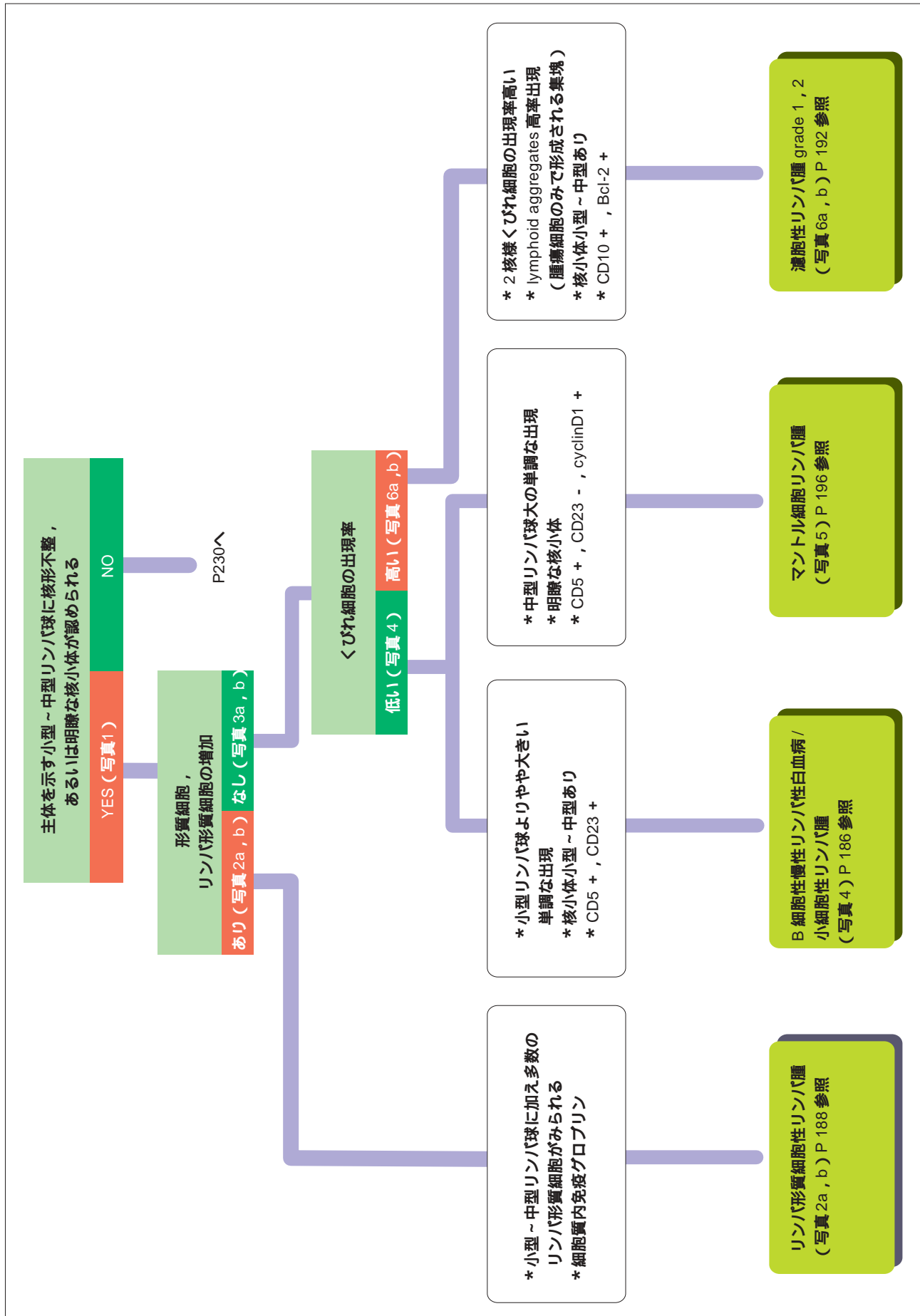


写真6 腺癌の転移 (Pap.染色, 対物×100)
 上皮性結合を示す、核偏在性、細胞質の豊富な腺癌細胞がみられる。

2. 小型～中型リンパ球が主体（70%以上）を占めるリンパ節病変の鑑別 2



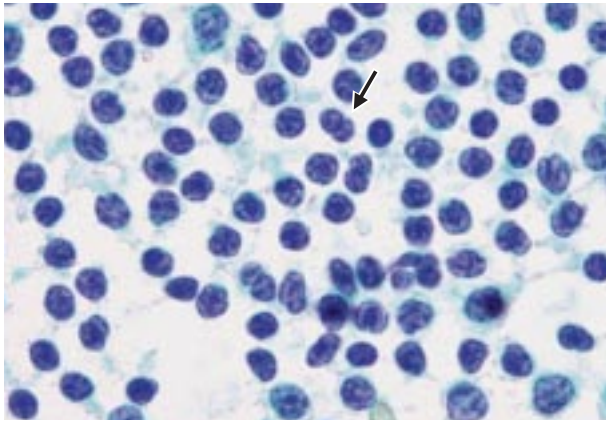


写真1 濾胞性リンパ腫 grade 1 (Pap.染色, 対物×100)
腫瘍細胞は非腫瘍性小型リンパ球に類似する大きさであり, 見落とされやすい細胞であるが高度なくびれを有する2核様くびれ細胞()がみられる。

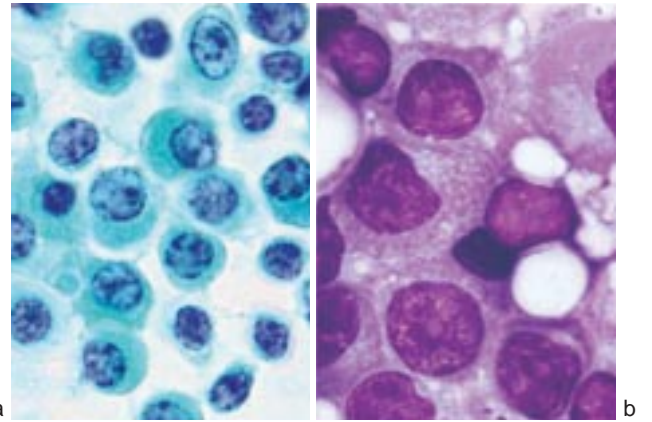


写真2 リンパ形質細胞性リンパ腫
(a : Pap.染色, b : Giemsa 染色, 対物×100)
中心性~偏在性核の形質細胞, 形質細胞様リンパ球がみられる(a). Giemsa 染色で細胞質の免疫グロブリンが赤染している(b).

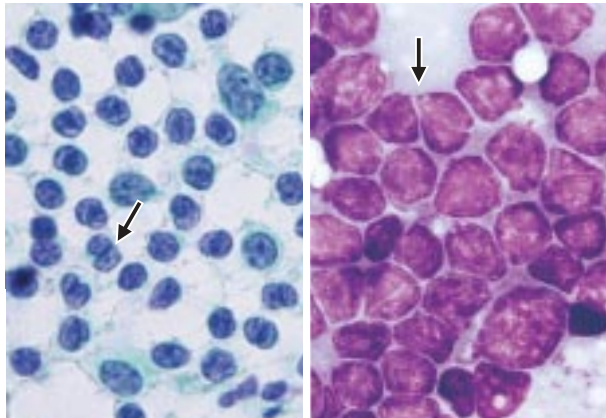


写真3 濾胞性リンパ腫 grade 1
(a : Pap.染色, b : Giemsa 染色, 対物×100)
2核様くびれ細胞()が多数みられる(a). Giemsa 染色標本においても2核様くびれ細胞()を観察できるが, Pap. 染色標本のほうが観察しやすい(b).

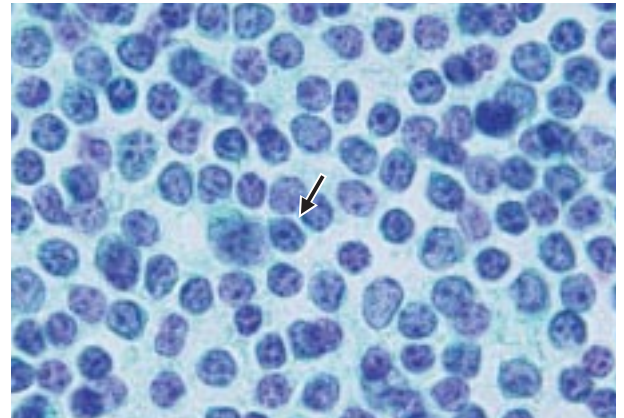


写真4 B細胞性慢性リンパ性白血病/小細胞性リンパ腫
(Pap.染色, 対物×100)
腫瘍細胞は非腫瘍性小型リンパ球に類似する大きさであり, 核のくびれも軽度であるが, 腫大した核小体()がみられる。

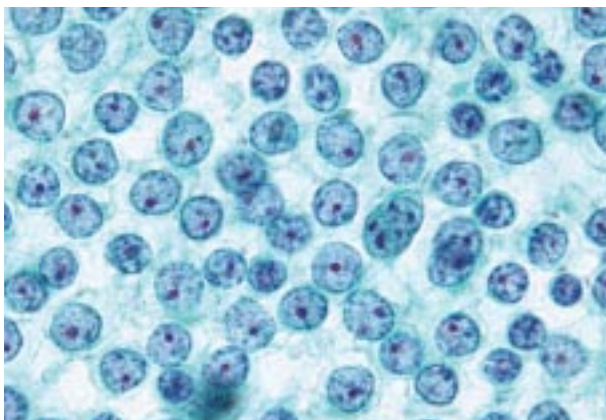


写真5 マントル細胞リンパ腫 (Pap.染色, 対物×100)
核は類円形核が多く, 核のくびれは軽度である。クロマチン凝集は軽度で単個の明瞭な核小体が見られる。細胞質は淡染性で比較的豊富である。

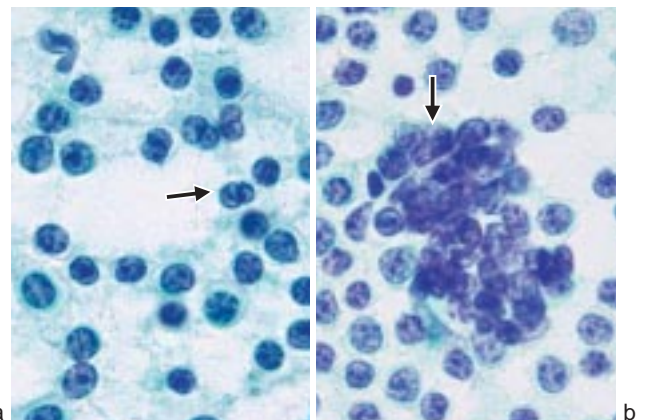


写真6 濾胞性リンパ腫 grade 1
(a, b : Pap.染色, 対物×100)
2核様くびれ細胞()が多数みられる(a). 腫瘍細胞のみで形成される Lymphoid aggregates ()がみられる(b).